

九州大学

大学文書館ニュース

第48号

2025. 3. 31

目 次

九州大学法文学部創立100周年記念展示 …… 2
 管理と自立の交錯 — 1980年代における九州大
 学の学生支援 — …… 5

九州大学大学文書館委員会名簿 …… 10
 九州大学大学文書館名簿 …… 10
 大学文書館日誌抄録 …… 11



「九州帝国大学医学部病理学教室において」（昭和19年7月29日）

このたび大学文書館に寄贈された、岡部信彦氏（1923～2015）旧蔵写真の一枚。岡部氏は1942（昭和17）年4月に九州帝国大学医学部に入学、1945年9月に卒業、病理学教室で学んだのち第二内科に入局し、それぞれ講師を務めた後、九州歯科大学内科学教室教授や久留米大学医学部第二内科学教室教授などを務めた。

写真後列の右から2人目が後藤正三助教授（病理学）、3人目が大野章三教授（病理学第一）、最前列左端の、上半身だけ写っている2人の左側が小野興作教授（病理学第二）、その隣が今井環教授（附属医学専門部）、そのほか病理学教室職員の姿が確認できる。小野・今井両教授が立っている穴は、防空壕として掘られたものである。岡部氏は後に「昭和十九年の夏、九大病理学教室では、研究室が並んだ一階の西側の棟を、病理解剖室が在る一階の東側の棟に結ぶ渡り廊下のコンクリート床の下に穴を掘って、防空壕とした。もぐり込むと二、三人で満員、天井は廊下の床であった。せいぜい緊急避難用の程度であった。」と記している（岡部信彦 著『千代の松原一池の金魚5』海鳥社、1996）。

九州大学法文学部創立100周年記念展示

飯 嶋 秀 治

1. はじめに

2024年11月5日から21日にかけて、九州大学伊都キャンパス・イースト1号館B棟1階のプレゼンススペースにて、九州大学文学部歴史編纂室と九州大学大学文書館の共催で、「九州大学法文学部創立100周年記念展示 ― 学生の変遷を振り返る」を開催した。本稿ではこうした展示をするに至った経緯とその結果を簡潔に紹介する。

2. 文学部歴史編纂室

この企画は2023年4月からの2年間、筆者が文学部歴史編纂室長となったことから始まった。2024年が法文学部100周年目にあたるため記念式典を開催し、2025年にその催しも含めて文学部100周年史を描くことは既に決まっていた。ところが法文学部100周年記念式典については既に寄付は始まっていたものの、2024年度に入りようやく委員が決まったばかりで、5月末になりウェブサイト・同窓会・記念誌・記念式典等の班が形成された。

筆者が2007年に就職した際には九州大学100周年募金の全学のやり方で首尾よく進まなかったため、法文学部100周年記念式典もその1日のための告知と催しでは学内的にも学外的にも意識が追いつかないと判断し、法文学部100周年にあたる2024年度内に「先導企画」として展示を行うなかで、記念式典が開催されることを共有してゆくことにした。そこで九州大学法文学部の過去の100年を考えるうえで分岐点となり、現在それを再考する意味がある時期として選ばれたのが1960年代の学生運動の時代であった。というのも人文社会科学系と呼ばれる諸学部は2015年の下村博文文科相の文系学部改組・廃止通知や2020年の菅義偉首相による日本学術会議人文社会科学系研究者の推薦任命拒否と、国家による人文社会科学系縮小への舵切が明らかになり、大学での自治が危機に瀕しているという意識があったためである。

3. 「混沌と創造 ― ファントム墜落事件と大学の自治を巡って」 ― 1960年代展

こうして、2023年7月に、文学部歴史編纂室企



1960年代展展示会場

画展として「九州大学の百年 ― 混沌と創造（仮）」企画書を書き、歴史編纂室の構成員でもある大学文書館の赤司友徳准教授と準備に入り、会場設営では附属図書館の方たちにお世話になった。

基本的に筆者が考えていたのは、今後の九州大学の100年を考えるうえでの重要人物・中村哲を輩出した当時の九州大学を展示することであった。そのために1960年代に人文社会科学系学部の教員として1968年のファントム墜落学生運動について様々な形で応答していた4名（法学部の具島兼三郎、文学部の滝沢克己、経済学部の秀村選三、教育学部の成瀬悟策）を選出した。その展示をするために、特に中村哲の周囲の人物には4名の方に聞き取りをし、また展示に選出された4教員のご遺族にも連絡を取った。

会場は附属図書館のエントランスホールで、会期はずれ込んで2024年3月から4月とし、年度をまたぐ形になったが、パネルを円環的に配置して中央にファントム墜落写真と学生運動のヘルメットを置き、内周に4教員の紹介と仕事、当時の学生運動の映像も投影して最後に中村哲の紹介を配置した。パネルの外周には当時の学生運動の資料を配して、学生運動に取り巻かれた中での教員たちの判断を可視化した。また会期中には赤司准教授の企画として、大学文書館で資料整理ボランティアをしている8名の方と当時の九州大学について語るシンポジウムを催した。



九大祭パンフレット

左：第36回（1983年11月19～22日開催）
右：第37回（1984年11月21～24日開催）

4. 「変貌するキャンパスライフ — 1980年代の九州大学」 — 1980年代展

2024年4月になると、赤司准教授を中心に、1980年代をふり返る企画展示を行うことにした。九州大学全体の100年史を編んだ経験者からは、1980年代は大学の諸制度にそれほどの変化がなかった印象があり危ぶまれる声もあった。だが、経済的には好景気であったこともあり学生生活の方に焦点を当てれば可能であろうとの判断であった。当時大学生生活を送っていた男女6名の方にインタビューを行っていった。

こうして「学生生活」「女子学生」「国際化」「就職」の4側面に分け、特に「学生生活」は、「社会経済の変化と学生生活」「九大祭」「学生支援」のサブテーマでどのように生活が変わったのかを展示した。展示においては、九大祭のパンフレットや卒業アルバム、写真、プロジェクターなどの視覚資料を多用することで、生活協同組合や学生案内などの統計資料を肉付けした。

会場はイースト1号館1階C棟のプレゼンススペースとし、2024年7月から8月にかけて開催した。この会場と会期は、毎年8月初旬にオープンキャンパスがあることから設定したものであった。1960年代に学生であった人物は現在75歳前後になっているはずだが、1980年代であれば55歳前後であり娘や息子が大学受験生であってもおかしくない、と予想したためである。

また会場にはポストイットとマジックを置き、現在の九州大学の教職員や学生がこの当時についてどのような思い出・感想を持つのかを共有して可視化できるようにした。

5. 法文学部100周年記念展示に向けて

こうして2つの企画展示を行いながら、2024年11月の九州大学法文学部創立100周年記念事業に向けて、3つの準備を進めていった。

1つは1960年代展開催後、滝沢克己のご遺族および関係者からの連絡があり、関係者の一人は元学生で現在教会の牧師を務めておられる方であった。彼らからは命日の等石忌に講演をしてほしいとのことであったので快諾した。この縁から、滝沢克己記念館に未整理なままに残された資料整理の話があった。

もう1つも1960年代展開催後、福岡県立美術館喫茶室に企画をやや縮小して、2024年8月から9月にかけて展示できないものかと打診があったので、快諾した。こうした学内外の連携からは、大学史が学内の歴史ではなく、学外の歴史も視野に収めるべきものであることを教わった。

最後の1つは、九州大学法文学部の過去100年を1960年代と1980年代で代表させてしまうとバランスを欠くため、歴史編纂室の企画とは別に九州大学附属図書館・大学文書館・文学部同窓会で2023年12月に開催した「特別展示『学徒出陣』から80年目を迎えて」を11月の100周年記念事業の際にも再展示させてもらう依頼であった。こちらは基本構成を変えないことと、本来は別企画であることを注記する形で了解を頂いた。

6. 法文学部100周年記念展示

こうした企画と準備があったので、2023年度から2024年度にかけて、学内外の教職員と学生、



法文学部創立100周年記念展示ポスター



法文学部創立100周年記念展示会場

その保護者やOB・OGに周知したうえで、2024年11月16日の九州大学法文学部創立100周年記念式典を挟む形で本稿冒頭に書いた「九州大学法文学部創立100周年記念展示 ― 学生の変遷を振り返る」を開催することができた。なお、展示の構成およびポスター作成には前2回の展示と同じく大学文書館の中村江里事務補佐員に助けてもらった。

展示内容は上述した3つの時代からなり、1940年代の「特別展示『学徒出陣』から80年目を迎えて」、1960年代の「混沌と創造 ― ファントム墜落事件と大学の自治を巡って」、1980年代の「変貌するキャンパスライフ ― 1980年代の九州大学」からなる。そしてこうして配列すると、1940年代には国家政策下の犠牲になった学生たちが、1960年代には大学を通じて国家の政策を問う存在となったがもの別れになり、1980年代には生活の充実を謳歌する消費の主体になったことが明らかになる。「学生の変遷」で意味したのはこの事態であった。

100周年記念展示準備中に気づいたのは文学部と教育学部には常設展示ケースがなかったことであったので、九州大学総合研究博物館が所持して

いた展示ケースを長期借用し、文学部ではこれまでの九州大学文学部関連の歴史編纂著作を展示することもできた。

法文学部100周年記念式典自体には200名前後の参加者があったので、その式典の前後に展示をふり返れるようにした。式典で登壇した方たちの挨拶で興味深かったのは、教員たちが九州大学の今後の経済発展について述べていたのに対して、同窓会の方たちの挨拶はむしろ人文学の社会的存在意義を強調していたことであった。そうした話を聞いた方たちがこの展示をどう見たのか。

7. おわりに

展示はそれ自体に意味がある訳ではない。どのような展示をしても歴史の編集は避けられず、その都度歴史が創造される。大事なのはそれをその形で展示する意味であり、問いかけである。

今回の展示では1940年代、1960年代、1980年代と20年ごとの展示をしながら、2000年代の展示は行わなかった。2000年代は既に現在の大学化の始まりであると考えていた（現在の九州大学については研究室で調査した『大学のエスノグラフィ』という報告書を作成している）。

筆者たちの問いかけは、1960年代にもの別れし、1980年代に消費の主体となった私たちが、あれから40年を経て、これからは生産の主体として、九州大学法文学部を礎とする文系4学部の100年を今後どのようにするのが望ましいと考えるのか、であった。現在の国家政策では冒頭に書いたように人文社会科学系の縮小化は明らかであるが、経済的な成功ばかりに傾注し、その内容を語らないことがまさに戦前の社会状況を生み出したのではなかったのでしょうか。九州大学が誇らしくアーカイブ化する中村哲は、まさに1960年代に闘ったのち、1980年代の日本に厭世的になりアフガニスタンに向かったのではなかったのでしょうか。

だとしたら、市民社会を構成する九州大学の卒業生、修了生たちは現状を見て九州大学に何を期待するのか。現在、九州大学を構成する教職員や学生たちは、今後の最高学府をいかなる場所にしてゆこうとするのか。この問いは、開かれたままである。

（九州大学大学院人間環境学研究院教授）

管理と自立の交錯 ― 1980年代における九州大学の学生支援 ―

赤 司 友 徳

はじめに

1980年代、日本の大学進学率は30%台後半で推移し、多少の変動はあったものの大きな増減はみられなかった。また、18歳人口は1992（平成4）年をピークに減少へ向かい始める。この時期、日本社会ではバブル経済の好況と国際化が同時進行し、大学には従来にも増して多様な学生や留学生の受け入れが求められるようになっていた。こうした状況を受け、大学は教育・研究のみならず、多様なニーズに応えられる運営体制を整備する必要に迫られた。

こうした背景のもと、1971（昭和46）年の中央教育審議会による答申が指摘した「高等教育の大衆化」と、それにもなう「大学制度の疲弊」があらためて注目されるようになる。もっとも、1980年代の大学改革を「自主努力」の方向へ大きく加速させたのは1984（昭和59）年に発足した臨時教育審議会（臨教審）であったともいわれる¹。そのなかで、大学は学生定員数の量的拡大だけでなく、学生の学力や興味関心、就学動機の多様化、教員組織やカリキュラム編成の硬直化、研究と教育をどう両立させるかといった質的課題があらためて論じられ、縮小する人口資源のなかで質の高い教育・研究を維持する方策が1980年代の喫緊の課題として浮上していた。

九州大学でも、教養部改革や入試制度の見直し、留学生受け入れの充実など多様な課題があり、それらの改革が試みられていた。一方、九州大学の年史において1970年代や90年代と比べて80年代は、大学運営の面では一定の安定化が進み、組織の再編や拡充に重点が置かれ、バブル期の学生生活を除けば学生に関する記述はそれほど多くない²。しかし、当時の「学生支援」に着目すると、大学と学生との関係は「安定」だけでは語りきれない側面がある。1980年代前半の学生生活は表面的な平穏さの一方で、学生の意識や思考様式



教養部学生会館・体育館と運動場の間の通路
（1985年6月24日）

は大きく変容していたように思われる。

そこで本稿では、1980年代に九州大学で進められた具体的な学生支援の取り組みとその背景を再検討し、2000年代以降に確立された学生支援体制との連続性を整理することで、この時期の施策がどのように位置づけられるかを考える手がかりとしたい。

1. 「学生支援」の来歴

日本の大学における学生支援の源流をたどると、第二次大戦後にアメリカから導入された Student Personnel Services（SPS）の理念が挙げられる。これは1951（昭和26）年から翌年にかけて、アメリカのSPSの専門家を招いて開催された「学生補導厚生研究会」を契機としている。SPSの理念は、正課外教育の役割を正課教育に対する補助的なものではなく補完的なものとして捉え、その重要性を強調するものであった。

この理念は1958（昭和33）年の学徒厚生審議会答申「大学における学生の厚生補導に関する組織およびその運営の改善について」に結実し、「学生生活の環境的条件を調整するとともに、学習体

- 1 天野郁夫「高等教育システムの変動（1）―エリートからマスへ―」『高等教育研究紀要』第18号、2000年、20頁。
- 2 九州大学百年史編集委員会『九州大学百年史』第2巻通史編Ⅱ（九州大学、2017年）、第10編「紛争後の大学改革」・第11編「教養部の廃止と学際大学院の設置」を参照。なお、本稿では九州大学の概況について特に注記がなければ『九州大学百年史』第2巻を参照している。

験の具体的な場面に即して、各学生の主体的条件に働きかける教育指導を行うことによって、その人格形成を総合的に援助すること」という厚生補導の定義が示された。また同答申では、入学者選考からオリエンテーション、修学指導、課外教育、適応相談など13項目にわたる厚生補導の領域が示されている。

しかし1960年代に入ると、学生運動の激化により、多くの大学で学生支援は停滞を余儀なくされた。学生運動への対応に追われる状況下において、唯一発展を遂げたのは保健管理の領域であった。1966（昭和41）年以降、東京大学を始めとする国立大学に保健管理センターが設置されていたのは、「スチューデント・アパシー」に代表される精神面での問題を抱える学生への対応が急務となったことが背景にある。

1970年代に入り学生運動が沈静化すると、今度は学生の「シラケ」が蔓延し、1980年代には「大学のレジャーランド化」が指摘されるようになった。この時期、学生支援活動の重要性は認識されていたものの、現場での取り組みは必ずしも十分とはいえなかった。学生支援活動が本格的に再構築されるのは、2000（平成12）年の「大学における学生生活の充実方策について」（廣中レポート）以降のことである。同報告は「教員中心の大学」から「学生中心の大学」への転換を提言し、その後の学生支援GPなど、現代の学生支援施策の基盤となっている³。

このように、戦後から1970年代までの大学では、奨学金や就職支援、健康管理など個別の援助は行われていたものの、それらを包括的に束ねる「学生支援」の概念が本格的に形成されるのは2000年代以降である。しかし、1980年代にも「学生支援」に相当する取り組みは着実に広がり始めており、本稿では便宜上、当時の施策も「学生支援」と呼ぶことにする。

2. 1980年代における学生支援の制度化とその背景

1980年代の九州大学で学生支援の制度化が進展した背景には、主に以下の3つの要因が考えられる。

1つ目は、すでに述べた高等教育の大衆化が定着し、多様な背景や能力をもつ学生が在籍するようになったことである。従来の画一的な対応だけでは十分な教育効果を上げにくくなり、学生個々

の学習環境や心理面のサポートを整える必要性が高まっていた。

2つ目は、学生運動の沈静化による学生の個人化や消費志向である。政治闘争が下火になる一方で、大学へよりきめ細かなサービスや支援を期待する学生が増えた。自治会の活動も低調となるなかで、以前は自治会を通じて行われていた大学との折衝が、個別の学生によって直接行われる例も増え、その結果として大学側が支援体制の拡充を迫られる面があった。

3つ目は、国際化の加速である。政府の留学生政策拡充を背景に、九州大学でも多文化対応が必須となり、留学生向けの語学教育や交流プログラム、住宅支援などが従来以上に重視されるようになった。

これらの要因を受けて、1980年代の九州大学では多様な学生支援策が具体化していった。以下、いくつかの事例を紹介したい。

（1）健康支援、メンタルヘルスケア

1966（昭和41）年、文部省令第二十二号により「国立学校設置法施行規則」が改正され、健康科学に関する研究、保健体育に関する教育、職員および学生の保健管理等を行うための施設として「健康科学センター」が設置された。これによって九州大学では、保健管理センター（1967年設置）が健康科学センターに改組され、健康管理と心理的ケアを含む包括的支援を提供するようになる。

また、九州大学では、心理的ケアを専門的に行う体制も整備された。1950年代後半から1960年代初頭にかけて、学生の子精神衛生問題が顕在化し、1950年代後半から学生の自殺事件が発生したことが契機となった。1961（昭和36）年に教養部



健康科学センター箱崎地区分室
（『学生案内 '87』1987年3月26日発行）

3 以上は、葛城浩一「日本における学生支援活動の歴史的変遷」（『高等教育研究叢書』112、2011年）、17-28頁。

心理学教室の有志教官が非公式に学生相談室を設置し、その後1963（昭和38）年に正式にカウンセリング・ルームとして設立された。また同年8月12日箱崎地区にも学生相談室が置かれた。専門スタッフによるカウンセリング体制の拡充は全国的にも注目され、1980～81年頃から長期面接の継続事例が増加傾向にあったという⁴。

こうした体制強化は、後に導入される「サイコ・リトリート」⁵などの先駆けともなり、医学部出身であった遠城寺学長の肝煎りで進められたとされる。当時は学友会保険部が精神神経系の予防と療養費補助を拡充するなど、メンタルヘルス対策への取り組みが活発化していたことも確認できる⁶。

（2）学生指導体制

修学上の問題への対応として、留年学生の増加は重要課題であった。たとえば『九州大学新聞』第776号（1984年1月25日付）によれば、1984（昭

和59）年の教養部の留年率は工学部33.3%、農学部27.4%、理学部23.5%、全学では564名（5.7%）と示されており、同号から「留年生シンドローム」と題した連載を開始している。

教養部では、同時期に進められたカリキュラム改革によって基礎教育科目が増加し、それが留年率を引き上げたとみられていた。1970年代の学生運動による留年とは性質が異なり、受験勉強からの反動や学業へのモチベーションの問題、大学生活への適応不全など複合的な理由が指摘されている。そこで、教養部では学生指導教官を設置し、修学上の問題を中心とした個別的・集団的な助言指導を実施。また留年学生への個別支援として、ガイダンス面談を行うなど具体的な対策が進められた⁷。

また、少人数制のチューター制度が試験的に導入されるなど、個々の学生に応じた支援体制の模索が1980年代には継続されている。

（3）就職支援・教養教育

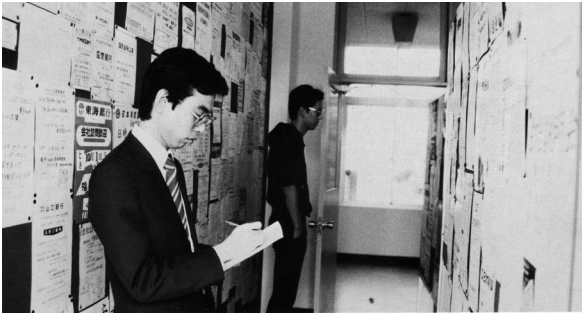
大学としての就職支援は、理系学部では各学科・専攻ごとに就職担当教授を置き、求人先開拓や推薦を行うのが一般的だった。文系学部では掲示板での求人情報提供が主であり、大学後援の就職ガイダンスなどを学生が任意で利用する状況が続いた。『九州大学新聞』の就職特集記事からは、学生たちが就職活動を通じて自己分析や社会観を形成していく様子がうかがえる。企業から求められる人材像に合わせることに抵抗を感じつつ、「シカタナイ」という諦観も同時に語られているのが印象的である。

1970年代以降、教養部における教育改革が本格化し、1972（昭和47）年から第二種一般教育科目や専門教育科目の前倒し実施が始まり、1981（昭和56）年からは少人数制の教養部ゼミナールが開始された。1984（昭和59）年度には帰国子女特別選抜制度も新設されるなど、多様な学生への対応が進められている。こうした教育面の改革は、修学支援や就職活動にも一定の影響を与えていた。



「留年生シンドローム」
（『九州大学新聞』第776号、1984年1月25日付）

- 4 九州大学教養部カウンセリング・ルーム編『九州大学教養部 カウンセリング・リポート』No.1、1982年。
- 5 峰松修、山田裕章、冷川昭子「分裂病圏の学生とPSYCHO-RETREAT」『健康科学』6、1984年。サイコ・リトリートとは、峰松らが開発した分裂病圏の学生が大学構内で自由に過ごせる場所（居場所）を提供する取り組みのことを指す。学生相談に生活臨床の考えを持ち込んだことから、療学援助とも言われる。
- 6 九州大学学友会保健部『昭和57年度保健部業務報告書 ― 年間行事および業務概況 ― 』九州大学学友会保健部、1982年、11-15頁。
- 7 園田五郎「学生の修学指導」日本学生支援機構編『大学と学生』330、1993年。



就職情報の掲示板
(九州大学生協同組合『九州大学卒業記念アルバム』
1983年3月)

(4) 留学生支援

政府の「留学生10万人計画」(1983年)を背景に、九州大学も国際交流委員会や留学生センター、国際交流課を設け、留学生受け入れを大幅に強化した。1983(昭和58)年には留学生会館が設置され、1985(昭和60)年には留学生教育センターを開設。日本語教育やチューター制度を整え、学習・生活両面での支援体制を拡充している。1984(昭和59)年に発表された『九州大学留学生白書』にも、多文化環境での教育・生活支援の課題が具体的に示されており、国際化の促進が大学運営における重要テーマとなっていたことがわかる。



留学生センター開所式(1980年4月26日)

3. 「理想の学生像、あるべき姿」

1980年代の九州大学が学生支援を進める上で念頭に置いていたのは、「精神的に健康で、主体的に学び、学業だけでなく課外活動や将来設計にも積極的に取り組む」学生像であったと考えられる。たとえば、国立大学保健管理施設協議会にお

ける学生のメンタルヘルスに関する特別委員会が作成し、国立大学に配布した『大学におけるメンタルヘルス ～教職員のためのガイドブック～』(1992年)には、大学教育の段階で自己同一性を確立し、将来に向けて健康や知的好奇心を持続させることが強調されている。これと同様に、立田教養部長は新生入生に対し「受身の態度でなく、将来にわたって、自分の力を最大限に発揮でき、かつ独創力に富む基盤を養」⁸うことを期待し強調している。これらはいずれも学生の「主体性」を重んじる内容といえる。

さらに、大学の運営方針や学生指導マニュアルなどでも、管理や秩序の維持を図りつつも、「学生の自主性を伸ばす」という理念が並立して示されることが少なくない。たとえば就任時の深山教養部長へのインタビューでは「大学当局が無闇に規制するのではなく、学生が自らの自治能力を発揮して問題を解決してほしい」という趣旨の発言が見られる一方、「現状ではそうした自律が十分発揮されておらず、結果として大学が管理に乗り出さざるを得ない」というジレンマが吐露されている⁹。

このように、大学側が求めた理想像には、①心身の健康を保ち、発達課題を乗り越えられる精神的しなやかさを身につけていること、②専門分野だけでなく、広い視野と独創的思考を重視する知的主体であること、③社会適応や国際的コミュニケーション力への期待、といった要素が複合的に含まれていた。

4. 学生たちの自己意識 ― 大学の理想とのギャップ

(1) 迷いと受験体制の後遺症

実際の学生たちは、このような大学の理想像とはしばしば異なる現実を抱えていた。1980年代前半には、過酷な受験体制をくぐり抜けてきた学生が、合格後の目標喪失感やモチベーション低下に陥る事例が増加していたとされる。先に触れた『大学におけるメンタルヘルス ～教職員のためのガイドブック～』が作成されたことや、その中で大学生のアパシーや自我同一性の問題が大きなテーマとして挙げられたことは、この時期の学生と大学が抱えた大きな課題であった。

こうした現象は単純な学力不足では説明しきれないものであり、カウンセリング・ルームでの長期

8 立田清朗「大学生生活をいかに過ごすか」『九州大学新聞』第786号、1985年3月25日付。

9 「学生の自立的活動を！―深山新教養部長へのインタビュー―」『九州大学新聞』第743号、1980年10月25日付。

面接希望者が徐々に増えていた理由も、自己同一性の確立過程での葛藤に起因すると考えられる¹⁰。

（２）就職活動に見る「順応」と「諦観」

『九州大学新聞』が主催した座談会では、就職活動期の学生たちが企業の求める人材像に自らを合わせるべきかどうか悩む様子が生々しく語られている。

ある文学部生が「学生時代ほど自由に考えられる時期はないはずなのに、実際のところは自由に思考している人というのはあまりいない」と指摘し、「高校時代の受験体制の後遺症」や「企業が受け入れてくれるような思考への変化」に言及している。また、経済学部生は「普段カーリーヘアで女の尻ばかり追い回していた奴が４年の夏になるとリクルートカットにして（中略）会社に入ると立派な会社人間ができると、学生の変容について皮肉を込めた発言を行った¹¹。また、1982（昭和57）年の座談会では、ある経済学部生が「会社の論理にのみこまれる人でなければ採用しない。そこで、我々が今の社会にさほど夢をもっていないとしたら、僕らのようになったとしても、「シカタナイ」んじゃないですか」¹²と諦観を示していることは興味深い。

これらの発言は、大学側が期待する「自主的・主体的」な成長とはやや異なる地平で、現実の学生が社会の要請に順応せざるを得ない苦悩を示唆しているように感じる。

（３）自治意識の希薄化と大学への依存

学生の自治能力の低下も顕著となっていた。学生自治会の組織率は1970年代後半の約65%から1982（昭和57）年には40%を下回るまでに低下しており、この状況について、深山教養部長は就任時のインタビューで興味深い指摘を行っている。

学問の自由だとか大学の自治だとかいう程の高尚な話ではなく、ごく低次元の話でいささか恐縮なんだけど、図書館横のサークル棟のあたりでする楽器練習というのがものすごくうるさいわけです。それに対して研究室な

んかから出るうるさくて勉強ができないなどという苦情に対しては、この狭いキャンパスなんだから教官・職員は我慢してくれと言いますよ。（中略）図書館で勉強している学生もうるさくて仕方ないわけです。それで、何とかしろということをこの学生達が僕ら大学当局に言ってくるんです。僕はおかしいじゃないかと思う。（中略）自分の仲間である学生がやってることなんだから何故学生が自分達で、それを調整することをしないんだと思うわけです。（中略）大学当局に言う前に何故自治会に言うという発想が学生に出てこないんだと、そのことがおかしいじゃないかと思うんです¹³。

深山教養部長は、1978（昭和53）年以降の学内の平静化について、それが必ずしも望ましい形での正常化ではないとの認識を示している。その理由として、現状は大学側の管理強化によって保たれているだけで、大学自治の重要な担い手である学生の自主的な力による部分が極めて少ないことを挙げる。実際、サークル棟での騒音問題に対して、学生係を通じた注意を繰り返し行っても改善されず、最終的に禁止の掲示を出さざるを得なかった事例では、一部の学生から「管理規制の強化だ」との強い反発があった。これに対し、深山部長は「必然性のない規制をしたときは、どんな批判をされても受け入れるが、十分過ぎる措置を行っても聞かないのであれば規制されても仕方がない」と述べた一方、「学生が自治を要求するなら自分たちがする行為に責任を持ち、学生同士で調整できることは自分たちで対処しなければならない」と、学生の自治意識の低下と大学の管理下に置かれることへの慣れを危惧していた¹⁴。

深山教養部長が語った事例は、大学側が求める「自律的な主体」とは必ずしも合致せず、むしろ大学当局に介入・管理を要請する構図を生じさせてしまうものである。結果として、大学は秩序維持のための規制を強化し、一方で学生のほうも「大学のサービスを利用し、支援を受けるもの」として大学を捉える傾向を強めていくことになる。

10 濱田哲郎、藤原勝紀「大学カウンセリングにおけるクライアントの訴えの変遷」『テオリア（哲学・心理学科紀要）』第20輯、1977年。

11 「来春卒業予定者大いに語る 覆面座談会」『九州大学新聞』第752号、1981年9月25日付。

12 「卒業予定者座談会 就職にみる現代学生気質」『九州大学新聞』第760号、1982年6月25日付。

13 注9に同じ。

14 注9に同じ。

おわりに

1980年代の九州大学における学生支援の制度化は、大学運営における大きな転換期であったといえる。大学当局は「理想の学生像」を掲げ、施設や組織の整備、指導方針の確立を通して、学生の主体性や価値観の形成に積極的に関与しはじめた。これはフンボルト型大学の自由放任から、管理・支援型への明確なシフトを意味していた。

大学側が目指したのは、精神的健康・主体的学び・広い視野・積極的な社会適応といった目標を備えた「理想の学生」の育成であり、そのための健康支援・修学指導・就職対策・留学生支援など、包括的な施策が整えられていく。しかし一方で、学生自身は就職活動における「シカタナイ」という感覚や、自治意識の希薄化、短期的成果志向といった現実を抱え、大学が求める理想像とのあいだにはしばしばギャップが生じていた。大学

の制度化と管理型支援が進むほど、学生の主体的な問題解決能力や自治意識が後退するという逆説も見られる。

こうした経緯は、2000年代以降の学生支援センター設立や「学生本位の大学づくり」に繋がる一方で、「主体性」をどのように支援するかという根本的課題を残したともいえる。長らく学生指導や支援を行った濱田哲郎が指摘したように「発達課題を抱える学生への支援が拡充される」¹⁵一方、深山教養部長の言う「学生自身が大学の管理や支援に依存しがちな風潮」¹⁶も生まれたからである。今後は、こうした管理型支援の成果と課題を踏まえながら、1980年代の学生支援が全国的にはどのように展開し、それが現代の大学改革とどのように連続しているのかをあらためて考えてみたい。

(九州大学大学文書館准教授)

15 注4に同じ。

16 注9に同じ。

九州大学大学文書館委員会名簿

委員長	理事・副学長	岩田 健治	委員	芸工院 准教授	上田 和夫
委員	文書館 教授	藤岡健太郎	〃	薬 院 教授	田中 嘉孝
〃	〃 准教授	赤司 友徳	〃	基 幹 院 准教授	飯嶋 裕治
〃	比文院 教授	伊藤 幸司	〃	先 導 研 准教授	山下(アルブレヒト) 建
〃	法 院 教授	熊野 直樹	〃	生物環境 教授	吉田 敏
〃	博物館 教授	三島美佐子	〃	図 書 館 館 長	内田 誠一
〃	韓 七 教授	永島 広紀	〃	博 物 館 館 長	堀 賀貴
〃	人文院 講師	国分 航士	〃	総 務 部 部 長	武井 久幸
〃	総務部総務課 課 長	佐竹 晃佳	〃	理学部等 事務部長	松川 耕三
〃	人文院 准教授	荒木 和憲	〃	図 書 館 事務部長	鈴木 雅子
〃	I M I 准教授	ガイナ ダニエル			

(2025年1月1日現在)

九州大学大学文書館名簿

館 長	理事・副学長	岩田 健治	協力研究員	長崎大学名誉教授	柴多 一雄
副館長	文書館 教授	藤岡健太郎	〃	九州大学名誉教授	柴田 篤
専任教員	〃 准教授	赤司 友徳	〃	九州大学名誉教授	有馬 學
兼任教員	比文院 教授	伊藤 幸司	〃	九州大学名誉教授	折田 悦郎
〃	法 院 教授	熊野 直樹	〃	九州大学名誉教授	後小路雅弘
〃	博物館 教授	三島美佐子	〃	九州大学名誉教授	高野 信治
〃	韓 七 教授	永島 広紀	〃	元西日本新聞社	大西 直人
〃	人文院 講師	国分 航士	〃	熊本学園大学商学部准教授	市原 猛志

協力研究員 清水建設株式会社技術研究所 松本 隆史
 総務課長（法人文書資料室長） 佐竹 晃佳
 事務補佐員 中村 江里
 “ 川島 絵梨
 “ 江頭 実生
 “ 浅田 美華
 “ 林田 直也
 “ 有田 陽子
 “ 奥平 恵
 “ 重松 利幸
 “ 古賀 光

事務補佐員 鈴木 一平
 “ 田村 彩
 “ 金丸 敏昭
 “ 竹中 景子
 “ 中山 勝子
 テクニカルスタッフ クウィーラ, ダーヴィット=ドミニク
 専門研究員 ルーヴェン・カトリック大学 博士課程
 ウェルス, ヨリンデ・ハンナ・エル
 静岡県立大学教授 森山 優
 (2025年1月1日現在)

大学文書館日誌抄録（2024年1月～2024年12月）

- 1.5（金） 黒田彬文氏より資料寄贈。
 1.9（火） 元九大生協職員一行、資料調査のため来館（16日、23日、30日、2月6日、13日、20日、27日、3月5日、12日、19日、26日、4月9日、16日、23日、5月7日、14日、21日、28日、6月4日、11日、18日、25日、7月2日、9日、16日、23日、30日、8月6日、20日、27日、9月3日、10日、17日、24日、10月1日、8日、15日、22日、29日、11月5日、12日、19日、26日、12月3日、10日、17日、24日も同様）。NHK福岡放送局より撮影のため来館、同局へ資料貸出。
 1.11（木） 九州大学文学部名誉教授、資料調査のため来館（18日、19日、30日、2月1日、8日、15日、26日、29日、3月7日、4月18日、25日、5月8日、16日、24日、30日、6月13日、20日、7月4日、12日、23日、8月1日、22日、9月5日、20日、10月17日、25日、11月7日、22日、26日、28日、29日、12月11日、18日、25日も同様）。NHK福岡放送局より来館、同局へ資料貸出。
 1.16（火） 施設部より資料移管。
 1.19（金） 東北大学准教授、資料調査のため来館。「技術と社会」資料館へ資料提供。
 1.25（木） 福岡女学院大学講師、資料調査のため来館。
 1.31（水） 読売新聞記者、資料調査のため来館。
 2.7（水） 大学文書館委員会開催。
 2.8（木） 農学部附属農場より資料調査のため来館。
 2.26（月） 立教大学准教授、資料調査のため来館（3月1日まで）。
 2.29（木） 基金事業推進室より資料寄贈。医学歴史館へ資料提供。
 3.2（土） NHK ETV特集「膨張と忘却 ～理の人が見た原子力政策～」で当館所蔵吉岡齊資料を紹介。
 3.5（火） 朝日新聞社より取材のため来館（11日も同様）。
 3.6（水） 国立台北大学研究員、資料調査のため来館。
 3.7（木） 筑紫陽八郎氏より資料寄贈。
 3.12（火） 西日本新聞社より取材のため来館（26日も同様）。
 3.13（水） 広島大学名誉教授、資料調査のため来館（15日まで）。村上公一氏より資料寄贈。
 3.22（金） 法文学部創立百周年先導企画展示「九州大学法文学部の百年—混沌と創造」を開催（於伊都キャンパス中央図書館3階エントランスホール、主催：九州大学文学部歴史編纂室、共催：九州大学大学文書館・九州大学附属図書館、3月22日～4月14日）。
 3.29（金） 医学部眼科学教室へ資料提供。
 3.31（日） 『九州大学大学史料叢書』第30輯刊行。『九州大学大学文書館ニュース』第

- 47号刊行。
大谷莊平事務補佐員、加藤絢子事務補佐員退任。
クウィーラ,ダーヴィト=ドミニク、テクニカルスタッフ退任。
- 4.1 (月) 川島絵梨事務補佐員就任。
- 4.10 (水) 「大学とは何かⅠ」(基幹教育総合科目) 開講(藤岡健太郎教授・赤司友徳准教授)。
- 4.11 (木) 「文書記録マネジメント論」(ライブラリーサイエンス専攻) 開講(藤岡教授)。
- 4.16 (火) 九州大学大学院地球社会統合科学府准教授、資料調査のため来館(23日、30日、5月7日、14日、21日、28日、6月4日、11日、18日、25日、7月2日、9日、16日、23日、30日、10月1日、8日、11月18日、12月10日も同様)。
- 4.19 (金) 田川市石炭・歴史博物館へ資料貸出(「令和6年度春季田川市石炭・歴史博物館山本作兵衛コレクション原画企画展／3館友好館協定締結記念『北へ南へー石炭がつなぐ田川・釧路・台湾ー』」にて展示、於田川市石炭・歴史博物館、4月23日～5月26日)。
- 4.25 (木) 総務部総務課総括係へ資料貸出。
施設部施設整備課へ資料提供。
- 5.1 (水) 施設部施設整備課より資料調査のため来館。
- 5.15 (水) 藤岡教授、九州大学新規採用職員研修にて講義。
- 5.16 (木) 基金事業推進室へ資料提供。
- 5.17 (金) 九州大学大学院工学研究院教授へ資料貸出。
- 5.20 (月) 広報部、『九大広報』取材のため来館。
FBS福岡放送より資料撮影・取材のため来館(6月5日、14日も同様)。
- 5.21 (火) NHK福岡放送局より撮影・取材のため来館(23日も同様)。
- 5.23 (木) 筑紫地区事務部総務課総務係より資料寄贈。
- 5.24 (金) 学務部学務企画課より資料移管。
- 5.27 (月) 宮崎浩行氏より資料寄贈。
- 5.28 (火) NHK総合テレビ「ロクいち!福岡」にて「第九」特集放送。
- 5.30 (木) 基金事業推進室へ資料提供。
内藤孝氏より資料寄贈。
- 5.31 (金) 神奈川大学研究員、資料調査のため来館(6月3日も同様)。
- 6.1 (土) 林田直也事務補佐員就任。
- 6.9 (日) NHK総合テレビ「ニュースおはよう日本」にて「第九」特集全国放送。
- 6.10 (月) 当館所蔵吉岡齊資料を紹介したNHK ETV特集「膨張と忘却～理の人が見た原子力政策～」が「放送文化基金賞」ドキュメンタリー部門最優秀賞を受賞。
「『第九』日本人初演100周年記念事業九大フィル史料展示」開催(於伊都キャンパス フジイギャラリー、主催:九州大学、共催:九州大学大学文書館、6月10日～8月4日)。
- 6.12 (水) 「大学とは何かⅡ」(基幹教育総合科目) 開講(藤岡教授・赤司准教授)。
- 6.14 (金) 瀧口隆一氏より資料寄贈。
- 6.25 (火) 柳川古文書館職員、資料調査のため来館。
- 6.26 (水) 人事課人事給与係、資料調査のため来館。
- 6.30 (日) FBS福岡放送にて「目撃者 f『学生たちの戦争～学徒出陣 ペンを銃にかえられて～』」放送。
- 7.1 (月) クウィーラ,ダーヴィト=ドミニク、テクニカルスタッフ就任。
- 7.12 (金) 玉泉大徹氏より資料寄贈。
木村ひさ子氏より資料寄贈。
『九大広報』vol.129「クローズアップ九大」にて大学文書館特集掲載。
- 7.16 (火) 古賀光事務補佐員就任、鈴木一平事務補佐員就任。
- 7.18 (木) 人文社会科学系事務部学務課へ資料提供。
- 7.26 (金) 特別展示「九州大学法文学部の百年『変貌するキャンパスライフー1980年代の九州大学』」開催(於伊都キャンパス イースト1号館1階C棟、主催:九州大学大学文書館・九州大学文学部歴史編纂室、7月26日～8月8日)。
- 7.31 (水) 福島哲之祐氏より資料寄贈。
- 8.1 (木) 西島利奈事務補佐員就任。
- 8.2 (金) 法学部同窓会事務局へ資料提供。

8.7 (水)	財務部資産活用課より資料調査のため来館。 施設部施設企画課より事務文書移管。		
8.8 (木)	谷口倫一郎館長より資料寄贈。		
8.21 (水)	大石直子氏より資料寄贈。		
8.23 (金)	企画部社会共創課より事務文書移管。		
8.26 (月)	学務部基幹教育・共創学部課共創学生係より事務文書移管。		
9.1 (日)	田村彩事務補佐員就任。	10.4 (金)	「文書記録サービス論」(ライブラリーサイエンス専攻)、「九州大学の歴史Ⅰ」(基幹教育総合科目) 開講(藤岡教授)。 人文社会科学系事務部総務課庶務第二係へ資料提供。
9.2 (月)	研究・産学官連携推進部研究企画課研究会計係より事務文書移管。		
9.3 (火)	総務部環境安全管理課環境管理係より事務文書移管。		
9.6 (金)	田川市石炭・歴史博物館職員、資料調査のため来館、同館へ資料貸出。 江頭和彦名誉教授より資料寄贈。	10.7 (月)	附属図書館事務部医学図書館受入目録係より事務文書移管。
9.10 (火)	財務部資産活用課より事務文書移管。	10.8 (火)	「文書記録活動論」(ライブラリーサイエンス専攻) 開講(赤司准教授)。
9.12 (木)	宇都宮大学主任研究員・日光市教育委員会事務局文化財課職員、資料調査のため来館(13日も同様)。	10.10 (木)	総合研究博物館教授へ資料提供。 農学部等事務部学生課学生係より事務文書移管。
9.17 (火)	企画部企画課、監査・コンプライアンス室監査係、人事部人事企画課、人事部人事給与課、国際部国際企画課総務係、国際部留学課、学務部学生支援課、学務部入試課入試第二係より事務文書移管。 飯塚市教育委員会教育部文化財保護推進室へ資料提供。	10.11 (金)	学務部学務企画課より事務文書移管。
9.18 (水)	農学部等事務部財務課経理係より事務文書移管。	10.15 (火)	田川市石炭・歴史博物館へ資料貸出(「令和6年度秋季田川市石炭・歴史博物館山本作兵衛コレクション原画企画展『ヤマの機械たち～石炭に挑む技術と機械～』」にて展示、於田川市石炭・歴史博物館、10月22日～11月24日)。 人文社会科学系事務部総務課へ資料提供。
9.19 (木)	総務部広報課へ資料提供。		
9.24 (火)	静岡文化芸術大学特任助手、資料調査のため来館(26日も同様)。		
9.26 (木)	九州大学大学院経済学研究院へ資料提供。	10.17 (木)	大学文書館委員会開催(書面回議)。
9.27 (金)	農学部等事務部総務課研究協力係より事務文書移管。	10.18 (金)	人文社会科学系事務部総務課へ資料提供。
9.30 (月)	谷口倫一郎館長退任。 西島利奈事務補佐員退任。	10.24 (木)	財務部財務企画課、財務部調達課、人文社会科学系事務部総務課、人文社会科学系事務部財務課、人文社会科学系事務部学務課、工学部等事務部総務課、工学部等事務部学術研究支援課、工学部等事務部経理課、施設部施設管理課工学系保全係、工学部等事務部教務課より事務文書移管。
10.1 (火)	岩田健治理事、館長就任。 岡部啓子氏より資料寄贈。 農学部等事務部財務課北海道演習林係より事務文書移管。	10.28 (月)	統合移転推進部統合移転推進課より事務文書移管。
10.3 (木)	藤岡教授、全国大学史資料協議会2024年度総会・全国研究会(於早稲田大学)にて「『九州大学百年史』のWEB編集と公開」を報告。	10.31 (木)	江藤まゆみ職域限定職員退任。

11. 5 (火) 九州大学法文学部創立100周年記念展示「学生の変遷を振り返る」開催(於伊都キャンパス イースト1号館B棟1階、主催：九州大学文学部歴史編纂室・九州大学大学文書館、11月5日～11月21日)。
11. 6 (水) 医系学部等事務部、医系学部等事務部学術協力課、医系学部等事務部財務課、医系学部等事務部学務課、病院事務部総務課、病院事務部経営企画課、病院事務部医療管理課、病院事務部研究支援課、病院事務部経理課、病院事務部患者サービス課、病院事務部別府病院事務長付経営企画係より事務文書移管。
- 11.11 (月) KBC九州朝日放送より撮影のため来館、同局へ資料提供。
- 11.12 (火) 大学文書館委員会開催(書面回議)。芸術工学部事務部総務課、芸術工学部事務部学務課、芸術工学部事務部財務課経理係、筑紫地区事務部総務課、筑紫地区事務部財務課、筑紫地区事務部教務課、施設部施設管理課、
- 附属図書館事務部芸術工学図書館目録情報係、附属図書館事務部芸術工学図書館情報サービス係より事務文書移管。
- 11.13 (水) 当館所蔵吉岡斉資料を紹介したNHK ETV特集「膨張と忘却 ～理の人が見た原子力政策～」が、第24回(2024年度)「石橋湛山記念 早稲田ジャーナリズム大賞」文化貢献部門にて大賞を受賞。
- 11.18 (月) 埼玉大学教授、資料調査のため来館(19日も同様)。
- 11.20 (水) 芸術工学研究院教員、資料調査のため来館(21日、28日も同様)。
12. 7 (土) KBC九州朝日放送にて「温故知新発見!九州スピリット」放送(14、21、29日も同様)。
12. 9 (月) 京都文教大学准教授、資料調査のため来館(10日も同様)。
- 12.16 (月) 大学文書館委員会開催(書面回議)。人事部人事給与課人事係へ資料提供。



九州大学箱崎サテライト(2025年3月14日撮影)

2023(令和5)年2月27日付けで、箱崎サテライトに現存する本部第一庁舎(登録名称：旧九州帝国大学本部事務室棟、1925年竣工)・本部第三庁舎(旧九州帝国大学本部建築課棟、1925年竣工)・門衛所(旧九州帝国大学門衛所、1914年竣工、1924年移転)・旧工学部本館(旧九州帝国大学工学部本館、1930年竣工)の4棟が、2024年8月15日付けで正門(旧九州帝国大学正門及び堀、1914年竣工、1924年移転)が、国登録有形文化財(建造物)に登録された。

九州大学大学文書館ニュース 第48号

発行日 2025年3月31日

編集発行 九州大学大学文書館

〒812-8581

福岡市東区箱崎6-10-1 旧工学部本館1階

Tel:092-642-2292

Kyushu University Archives

印刷 株式会社ミドリ印刷